【191】

氏　名(本　籍)	有　沢　俊太郎（富　山　県）
学位の種類	博　　士（教育学）
学位記番号	博　乙　第　1,050　号
学位授与年月日	平成 7 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	明治前中期における日本的レトリックの展開過程に関する研究
主　査	筑波大学教授　　湊　吉　正
副　査	筑波大学教授　　齊　藤　太　郎
副　査	筑波大学教授　　桑　原　隆
副　査	筑波大学教授　教育学博士　福　沢　周　亮

論　文　の　要　旨

1．本論文の目的

本論文は，18・19世紀の英国のレトリックが，明治前中期（明治10年代・20年代）のわが国の学術界（語学・文学界），教育界（国語教育界）に導入され，日本的レトリックとして定着・活用されていったその道筋を明らかにすることを目的としている。

著者は，英国のレトリックは表現学（表現法，表現技術学）であると同時に表現教育学（人間形成の学）であったとしているが，そのような英国のレトリックが，明治前中期のわが国においてどのように迎え入れられたか，その展開過程の実態とその問題を究明することは，これからの時代におけるわが国に固有な国語科教育表現学を構想し成立させる上において不可欠の作業であるとの確固とした認識のもとに，上記の目的を設定している。

2．本論文の構成と概要

本論文の部・章立ては，次の通りである。

序論　研究の目的，課題，方法

第1部　明治前期における翻訳レトリックの成立――18・19世紀の英国のレトリックの理解

序　章　明治前期における英国のレトリック概観

第一章　19世紀の百科事典にあらわれた英国的論理の理解――Information for the people（Rhetoric and Belles-Lettres）における composition と taste の訳出

第二章　H. ブレアの SENSE の理解――Lectures on Rhetoric and Belles Lettres の訳述

第三章　British Elocutionary Movement の理解と活用――A.M. Bell, Bell's Standard Elocutionist の訳述

第四章　A. ベインの Figures of Speech 論の理解――今村長善『文章哲学』における詞姿論（「文趣論」）の性格

第五章　高田早苗における英国のレトリックの理解――『美辞学』（前編）にみられる A. ベインと H. スペンサーの引用

終　章　翻訳レトリックの性格

第２部　明治中期における実践レトリックの性格

序　章　翻訳レトリックの展開（実践レトリックの調査）

第一章　演説レトリックの実態

第二章　作文レトリックの実態

第三章　題の設定・操作による作文学習――三つの主義にかかわる学習

終　章　実践レトリックの性格

結論　日本的レトリックの展開過程

序論では，前記の目的が明示され，それを達成するために，次の三項目の課題が設定されている。

(1)　翻訳レトリックの性格の究明（第１部）

(2)　実践レトリックの性格の究明（第２部）

(3)　日本的レトリックの展開モデルの提示（結論）

全体を通じて文献学的な方法を採りつつ論述を進めるべきことを述べている。

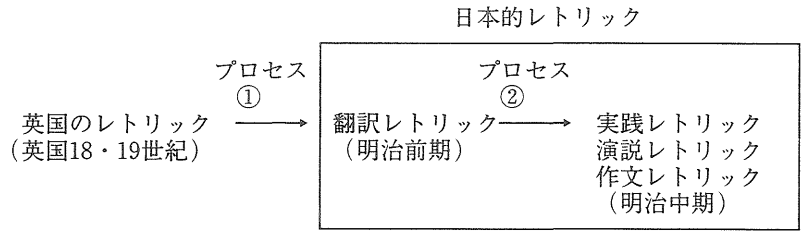
第１部。わが国では18・19世紀の英国のレトリックが明治10年代から輸入・紹介されているが，そこでさまざまな理解の仕方が行われ，その様相は翻訳書等に現れている。著者は，その段階を翻訳レトリックと名付け，全五章の五つの事例から理解の様相を把握することによって，翻訳レトリックの性格を明らかにしている。

著者は，英国のレトリックがわが国の翻訳等の操作を経たとき，ａ翻訳レトリックの光の部分（翻訳等が成功した部分）と，ｂ翻訳レトリックの影の部分（翻訳等が失敗した部分）の二つの特徴がみられるとする。そして，翻訳レトリック自体の内容的特徴を，Ⅰ言語論理主義，Ⅱ事実主義（実証主義），Ⅲ新表現技法主義（(1)詞姿形成法(2)発音・発声法）の三類型（部門）に分け，以上のａとｂの特徴をそのそれぞれの類型ごとに記述している。著者は，この翻訳レトリックを日本的レトリックの第一段階（プロセス①）に位置づけている。

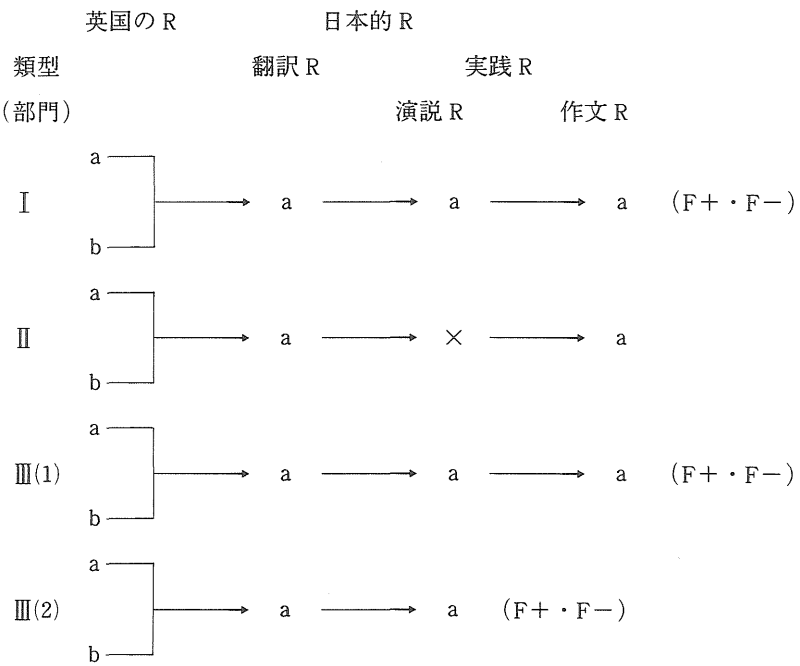
第２部。翻訳レトリックが国語学習等に導入されて実際的性格を有するに至ったものを，著者は，実践レトリックと名付けている。そして，前記の翻訳レトリックａ・ｂが実践レトリックではどのように変容しているか，その様相を明治20年代の表現（演説・作文）教材の内容分析を行うことによって明らかにしている。

内容分析は，次の二つの視点にもとづいて行われている。すなわち，ア．翻訳レトリックの特徴Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（(1)・(2)）の光の部分（ａ）を教科書等がどのように扱っているか，イ．翻訳レトリックの特

徴Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（(1)・(2)）の影の部分（ｂ）は教科書等では全く見られないものかどうか，もし現れるとすれば，どこに，どのように現れるか，以上それぞれについて考察している。著者は，この実践レトリック（演説レトリック・作文レトリック）を，次図のように，日本的レトリックの第二段階（プロセス②）に位置づけている。



結論では，第１部・第２部で考察してきたことをプロセス②を中心に整理し，日本的レトリックの展開過程として，次図のようにモデル化している。



ここで，Ｆ印はフィード・バック現象を示し，Ｆ（＋）は「正のフィード・バック現象」（ａの部分をさらに補強，強化するもの），Ｆ（－）は「負のフィード・バック現象」（ｂの部分をさらに補完，補充するもの）をそれぞれ示すとされる。このモデルから，著者は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（(1)・(2)）の各部門の全体を通じて大きく三つのタイプのあることを発見し，その各特質について解明している。さらに，作文レトリックにおける題による学習のフィード・バック現象としての意義を解明している。

3．本論文の課題と成果

著者は，序論において提示した三つの課題のそれぞれについて広い範囲にわたる丹念な調査と緻密な考察によって論証を行い，解明を加え，全体として独創的な成果をあげている。

(1) 翻訳レトリックの性格の究明（第1部）

著者は，H. Blair, A. Bain などの諸著作をはじめ18・19世紀の英国レトリックの主要著作を広く調査しそれらの内容を検討し，またわが国の明治10年代・20年代に現れた菊池大麓『修辞及華文』(明12)，高田早苗『美辞学』前・後編（明22）等々の諸著作を深く調査・分析した。そしてそこから五つの典型的事例を選び，書誌学的に確定された明治前期の原本とその訳本とをつきあわせ，翻訳，抄訳，訳述，引用等の実態を把握し分析している。その際，英国の伝統的なレトリックの三領域（創構・配列論，文体論，発声論）との対比を通じて，次図のように，翻訳レトリックの三類型（部門）を再構成した。

1．翻訳レトリックの創構・配列論 ─ Ⅰ　言語論理主義
　　└ Ⅱ　事実主義（実証主義）

2．翻訳レトリックの文体論 ┐
　　├ Ⅲ　新表現技法主義 ─ (1)詞姿形成法
3．翻訳レトリックの発声論 ┘　　└ (2)発音・発声法

さらに，以上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（(1)・(2)）の各部門の記述に際して，a（光の部分）・b（影の部分）を設定したことも特筆すべきことであった。

(2) 実践レトリックの性格の究明（第2部）

著者は，翻訳レトリックの実践レトリックへの展開と変容の実態の把握を通して，実践レトリックの性格を明らかにしているが，その際，膨大な量に及ぶ明治中期の演説教科書，作文教科書（この時代の教科書が表現教授学習資料としての性格も合わせもっていることも解明されている）を丹念に調査し，内容分析を行っている。

すなわち，演説教科書33種，作文教科書105種（いずれも国立教育研究所教育情報・資料センター，国立国会図書館所蔵の教科書）をくまなく調査し，内容分析を行い，小学校用・中学校用等の校種・対象学年の違いにも注意を向け，翻訳レトリックの特徴Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（(1)・(2)）の光の部分（a）並びに影の部分（b）がそこにどのように扱われているかについて細目に即しつつ緻密に考察し，その実態を明らかにしている。

(3) 日本的レトリックの展開モデルの提示（結論）

著者は，前記のように日本的レトリックの展開過程をモデル化しているが，そこにおいてⅠ・Ⅱ・Ⅲ（(1)・(2)）の各部門の全体を通じて大きく三つのタイプのあることを発見し，その各特質について

解明している。その際，さらに正・負の各フィード・バック現象という枠組を導入し，特質の解明の上で有効な武器として活用している。

三つのタイプとしては，第1のタイプ［Ⅱ　事実主義（実証主義）→展開が不完全なもの］，第2のタイプ［Ⅲ(2)　新表現技法主義（(2)発音・発声法）→展開過程はもつが一段階で終わるもの］，第3のタイプ［Ⅰ　言語論理主義，Ⅲ(1)　新表現技法主義（(1)詞姿形成法）→二段階の展開過程をもつもの］の以上三つをあげている。これら三つのタイプ及び作文レトリックにおける題による学習のフィード・バック現象について，日本的レトリックの形成という観点から，歴史的な意義づけとともに表現教育学的意義づけを与えている点は独創的である。

審　査　の　要　旨

(1)　英国の18・19世紀のレトリックの主要著作，それを導入したわが国の明治中期における修辞学書等の主要文献，またそのような翻訳レトリックが変容・定着したとみられる実践レトリックに属するとみられるほとんどすべての演説教科書・作文教科書類，以上三つの資料的領域にわたって大量の関係資料を調査し，それらの内容についても分析・検討し，そうした作業的基盤の上に論証を進めていること。

(2)　第1部・第2部を通じて，日本的レトリックの展開・変容について翻訳レトリックと実践レトリック（演説レトリックと作文レトリック），日本的レトリックの内容的特徴をめぐってⅠ・Ⅱ・Ⅲ（(1)・(2)）という類型（部門），またそれらについての光の部分（ａ）と影の部分（ｂ），さらに日本的レトリックの展開モデルにかかわる正・負のフィード・バック現象というようないくつもの解釈的な枠組を，論述の展開上の必要性に応じて積極的に設定し，それらを有効適切に活用していること。

(3)　本論文のテーマ的内容的領域にかかわる多くの先行研究（波多野完治・野地潤家・滑川道夫の諸著作をはじめとする）を検討・吟味し，それらの成果を生かしながら，それらの水準を超えた，スケールの大きな総合的研究をまとめあげていること。また，明治30年代以降，島村瀧太郎・五十嵐力などとその後の時期については，これまでにもかなりまとまった研究が出てきているが，明治10年代・20年代のレトリックについてこれだけ力のこもった本格的な研究は初めてであること。

(4)　著者がさらに大きく構想している国語科教育表現学の構築という視野からみたとき，本論文の成果は，その基礎作業として明確に定位されるべきこと。したがって，著者のこれからの研究の発展の方向が明確に透視され得ること。

以上四項を通じて指摘したように，本論文は，きわめて内容の充実した独創的なものであり，高く評価されるものである。国語教育界の研究面の発展に寄与するところ大なるものがある。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。